

# ジョン・R・サール『逆さまになった言葉』

ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス、1983年10月27日版

レビュー: ジョナサン・カラー『ディコンストラクション: 構造主義後の理論と批評』(コーネル大学出版)<sup>訳注</sup>

<http://www.nybooks.com/articles/1983/10/27/the-word-turned-upside-down/>

John R. Searle, The Word Turned Upside Down

in The New York Review of Books, OCTOBER 27, 1983 ISSUE

Review: On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism, by Jonathan Culler

Cornell University Press, 307 pp., \$8.95 (paper)



1.

「ディコンストラクション」<sup>訳注</sup>は最近アメリカの文学批評で影響力をもつ運動の名前である。基本的理論は文学批評によるのではなく、フランスの哲学教授ジャック・デリダによって発展させられた。そして彼の考えの多くは今度ニーチェとハイデガーに負っている。カラーはデリダの弟子として書き、彼の第一の目的は彼の師匠の哲学を解説することであり、それがどのように「文学理論のもっとも重要な問題を担う」(p.12)かを示すことである。

正確にディコンストラクションとは何か、そしてアメリカの哲学者たちがおおむね無視している間に、なぜそれはそれほど影響力をもつようになったのか? 私はほとんどの教えを実践しているディコンストラクション主義者にあなたたちが定義について尋ねるなら、彼らはそれを

---

訳注 邦訳; ジョナサン・カラー『ディコンストラクション』、2巻(岩波現代選書 105)、岩波書店、1985、『新版 ディコンストラクション』、2巻(岩波現代文庫)、2009

訳注 deconstruction。デリダの造語で「脱構築」とも訳されることがある。

説明できないだけでなく、ディコンストラクションの狙いの一つである「ロゴス中心主義」<sup>訳注</sup>を、そう、ディコンストラクトすべき兆候とその要求をみなすだろう。「ロゴス中心主義」で、彼らは大ざっぱに、西欧哲学的伝統を特徴づける真理、合理性、論理、「言葉」への関心を意味する。私は、それを理解する、多くの実践家たちが認める最善の方法は、少なくとも差し当たり、テキストを扱う一群の方法、ロゴス中心主義的傾向の転覆を一般的に目的とする一群のテキスト的戦略とみなすべきである。カラーの本のいくつかのメリットの一つは彼が、彼らの共通の狙いの戦略と性格のカタログを示していることである：

文章をディコンストラクションすることは、文章が主張する哲学を文章がいか無効にするかを示すことである[p. 86]。<sup>訳注</sup>

そのような戦略は非常にたくさんあるが、少なくとも三つが際立つ。第一のもっとも重要なものは、ディコンストラクション主義者はなんらかの西欧の知的歴史における伝統的対立、すなわち、話し言葉／書き言葉、男／女、真実／フィクション、字義的／比喩的、意味するもの／意味されるもの、実在／仮象、を探ることについてである。そのような対立において、ディコンストラクション主義者は第一項ないし左項は、右項に対する優越的地位を与えられ、右項は左項の「混乱、否定、予兆、分裂とみなされる」(p. 93)。これらの階層的対立は申し立てでは、合理性、論理、真理の探究における抑圧的利害関心を伴うロゴス中心主義のまさに核心にあるとされる。

ディコンストラクション主義者は、これらの対立を無効にすることを望み、第一に階層を示すことによって、右項が本当は左項に先行し、左項が単に右項の特殊例であること、右項は左項の可能性の条件であることを示そうと試みることによってロゴス中心主義を無効にすることを望む。この操作はいくつかの非常に奇妙な結果を生む。話し言葉は本当は書き言葉の一形式であり、理解は誤解の一形式であり、有意味な言語と考えるものが単に意味するものの自由な戯れであったり、テキストのテキストへのつぎはぎの果てしない過程だということになる。

だがこの操作は単に二つの手続きのひとつにすぎず(“*un double geste, une double science, une double écriture*”-デリダ、*Mrges*<sup>訳注</sup>)、第二段階の目的は「システムの一一般的な置き換え」(p. 86)であり、その目的は古典的対立によって表現された価値全システムを再構築し、無効にし、置き換えることである。これはまた、話し言葉と書き言葉は「原書き言葉」の両形式であり、「男女が原女性の変形である」など(p. 171)ことが生じるため奇妙な結果を生む。「原書き言葉」が「書き言葉の劣った概念」を今度は話し言葉と書き言葉の両方を含む新しい概念」に再構築する。「女性の劣った概念」があろうとなかろうと、必要な類似の再構成は顕在的には延べられないが、人はカラーが真だと考えることを合理的

訳注 logocentrism。やはりデリダの造語。単に「ロゴセントリズム」とされることが多い。「ロゴス」は古代ギリシア語の「ミュトス」(神話、物語)に対比されるものとしての「理性」「論証」。

訳注 「文章」としたのはポストモダニストのジャーゴン、仏「ディスクール」(discours)の英語「ディスコース」(discourse)。言語学で、文以上の構文単位のこと。以下、ポストモダニストのジャーゴン「パロール」(parole、英; speech)、エクリチュール(ecriture、英; writing)は、それぞれ「話し言葉」「書き言葉」、アルシ・エクリチュールは「原=書き言葉」、signifier; シニフィエは単に「記号」とした(テキストの外部はないから)。

訳注 “*Marges de la philosophie*” 1972、邦訳、ジャック・デリダ『哲学の余白に』法政大学出版局、2007

に仮定することができるかもしれない。

第二の戦略は、いわばゲームの秘密をもらすテキストにおけるなんらかのキーワードを探すことである。何らかのキーワードはテキストの議論に本質である「対立に現れる」が、それはまたその対立を転覆する仕方で機能する。カラーが示す例はカントの「パレルゴン」、プラトンの「パルマコン」、ルソーの「代補」、マラルメの「イメヌ」である。<sup>訳注</sup>

これらの言葉は、ロゴス中心主義的結論を裏付ける、あるいは押し付けるためのこじつけの試みがそれ自体テキスト、価値のある注釈につながりうる不自然な曖昧さの瞬間を感じさせる点である[p. 213]。

そのような価値のある注釈の一つの例はルソーが性的経験と書き言葉の理論の両方を議論する際「代補」を使うというデリダの発見である：彼はともに書き言葉は（話し言葉に対する）代補であり、マスターベーションは（セックスに対する）代補であると言う。デリダは「代補の繋がり」の内部で、書き言葉からオルガニズムを分離することは困難である」と結論する。（*Of Grammatology*, p165）。<sup>訳注</sup>

第三の狙いは、テキストの中で生じるその種のメタファーのようなテキストの周辺的な特徴に詳しく注意を払うことである、なぜならそのような周辺的特徴は「真に重要なものへの手掛かりである」からである(p. 146)。

## 2.

カラーが記述するディコンストラクションは非常に将来有望のように聞こえないかもしれないが、テキスト分析の方法の検証はカラーとデリダがわれわれにどのようにディコンストラクションが働くと感じるかを示す例のいくつかに今度目を向けさせるような結果にある。カラーの範例的例、どのように様々なディコンストラクションの特徴や操作が「実践で取れん可能性がある」(p. 86)かを示すと提示するもの、は彼がニーチェの因果性のディコンストラクションと記述するものである。<sup>訳注</sup>

痛みを感じることを考えてほしい。これは人に原因を探させる、たぶんピンを調べることを引き起こし、人は因果的秩序を生む知覚ないし現象的秩序をつなげ、反転する。ペイン…ピン、ピン…ペイン。「われわれが意識的になる外部世界の断片がわれわれに生み出された効果の後に生じ、その「原因」としてポステオリに投影される[p. 86]。

これまでこれは何もディコンストラクション的には聞こえない。カラーはそうは思わず、長く引用するに値する議論のディコンストラクション的スタイルのアイデアを手に入れると考

---

訳注 parergon; 古代ギリシア語で、芸術作品に対する装飾的、派生的、二次的作品。pharmakon; プラトン『パイドロス』のお話に出てくる、泉パルマケイアに由来する。supplement; 普通は「追加」「補足」。hymen; ハイメン、処女膜、ギリシア神話で婚姻の神ヒュメン。

訳注 ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』2巻、現代思潮新社、2012

訳注 ニーチェ『権力への意思』を参照していると思われるが、参照先は不明。なおペインは痛みだが、「ピン・ペイン」の語呂を壊さないようペイントした。

える:

この単純な例が含意することについて可能な限り顕在的にしよう…。ペインの経験はわれわれにピンの発見を引き起こし[斜体はカラー]、そのため原因の産出を引き起こすと主張される[斜体は私]。因果関係をディコンストするため人は原因の概念を操作し、それを因果関係それ自体に適用しなければならない[P. 87]。

そのためいかなる厳密な正当化を否定しつつ、因果関係の不可欠性を主張している(p. 88)。さらに、

ディコンストラクションは因果的図式の階層的対立を逆転する。原因と結果の区別は論理的に原因を起源にし、時間的に先行させる。結果は二義的因果に由来し、依存する。この階層の理由ないし含意を探求することなく、対立内で働きつつ、ディコンストラクションが特性の交換を生み出すことによって、階層を逆転させることに注意しよう。結果が原因を引き起こす原因を引き起こす場合、原因でなく、結果が起源として扱われなければならない。原因を高める議論が結果を支持するため用いることができることを示すことによって、人は階層化の修辭的操作の責任を明らかにし、取り消し、重要な置き換えを生み出す[p. 88;斜体は私]

私はディコンストラクションの力を示威するにはほど遠く、カラーのこの例の議論は混乱の塊であると考え。これには最も華々しいいくつかの誤りがある。

1. どんな例であれ、結果が「原因の産出を引き起こす」あるいは結果が「原因となる原因を引き起こす」という考えを支持するものは何もない。ペインの経験はわれわれが原因を探し、それゆえ間接的に原因の発見を引き起こす。結果が原因を産出するという考えは正確に例が実際に示すものの反対である。
2. 「起源」という言葉は、まったく異なる意味で用いられていることである。「起源」が因果的起源を意味する場合、ピンはペインの因果的起源で用いられている。「起源が認識論的起源、いかにわれわれが見つかるか、を意味する場合、ペインの経験はその原因の発見の起源である。だが「原因でなく結果が起源として扱われなければならない」ところの「起源」のいくつかの単一の意味があるということは、これからの結論には単に混乱である。
3. 原因と結果は相関的な用語なので、最初は二つの間に何ら論理的階層はない。一方は他方の観点から定義される、たとえば OED は「原因」を「結果を生むこと」と定義し、「結果を「引き起こされる、ないし生み出される何か」と定義する。
4. カラーが主張することとは反対に、何もその例では、因果関係がいかなる「厳密な正当性」を欠き、いかなる「意義ある置き換え」が生じることを示さない。因果関係のわれわれの常識的先入見は注意深い精査と批判に値するが、カラーの議論において、われわれの因果関係についてのもっとも素朴な見解に何も変化を強いることはない。

たとえディコンストラクション的方法のためのカラーのパラダイムの例であるとしても、この一つの例に基づいてディコンストラクションを非難するのが不公平なのは疑いない。だから、デリダのディコンストラクションのお好みの例、書き言葉が本当は先立ち、話し言葉は本当

は書き言葉の一形式であることを示す話し言葉と書き言葉の対立のディコンストラクションに今度は注意を向けよう。さて、ひと目で、これは哲学においてかなり枝葉末節の問題である。言語哲学でさえ、ほとんどの著者は書かれた言語と話された言語の違いや類似性に対して注意を払っていない。

しかしデリダは問題は極めて重大だと考える。彼は書き言葉を犠牲にする口頭の話し言葉の「特権」や書き言葉の「抑圧」は出来事、プラトンに始まり、現代哲学のロゴス中心主義を貫く出来事の根本的操作以下ものであることは決してない。彼は要するに、ロゴス中心主義は音声中心主義<sup>訳注</sup>であると考え。かなり典型的な陳腐な文章は、デリダの散文を理解できる程度の長さで引用するが、次のとおりである。

音の特権は回避されえた選択に依存しない。それはシステムの現在に一致する（「生命」の、「歴史」の、「自己関係としての存在」のと言おう）。非存在として、非言葉的に、それゆえ非経験的にあるいは非偶発的意味するものとして、それ自体現前する－音の実体を通じて「聞くこと／自分が話すことを理解する[s'entendre parler(話を聞く)]」システムは、必然的に全出来事間の世界の歴史を支配してきた[斜体は私]。そしてそれは世界性と非世界性、外部と内部、観念性と非観念性、普遍的と非普遍的、超越的と経験的などの間の違いから生じる世界の観念、世界の起源の観念、世界の起源すら生み出してきた。[On Grammatology, カラーによる引用, p. 107]。

表面上この主張は異様である。話し言葉と書き言葉の区別はプラトン、アリストテレス、アキナス、デカルト、カント、スピノザ、ライプニッツ、ヒュームなどにとって単に大して重要ではない。このリストの中でデリダが話し言葉の特権性について何らかの証拠を提供する唯一の人は、プラトンだけである。プラトンは、パイドロスで質問に書かれたテキストが服従することの重要性についてわずかに意見を述べた。プラトンは正確に書かれたテキストについてできない仕方で話をする人について質問をすることができると指摘している。[1]<sup>訳注</sup> これらすべての哲学者たちは普遍や特殊、超越的や経験などのような問題について自ら話すことに注意してほしい。これらの哲学者たちにとって、これらの問題は話し言葉と書き言葉の違いから生じもしないし、話し言葉の「特権的な」に依存してもいない。デリダのターゲットの一人、フッサールは、意味は書き言葉のテキストに大きく優越する仕方で話し言葉において現前すると感がる点で、特別ではないが、変わっている。

しかしデリダの説明において、フッサールにだけ本質的なのではなく、哲学に本質的であり、実際、話し言葉が誤って書き言葉にたいして特権的であるべき、現在を含む「すべての出来事の中の世界の歴史」にとって本質的である。デリダの主張を額面通り受け取るなら、私は反対の議論を等しくでき、よりもっともらしくさえできると思う。アリストテレス論理学の中世の発展から、ライプニッツの普遍言語、フレーゲ、ラッセルを通じて、現代の記号論理学の発

---

訳注 phonocentrism; フォノセントリズムと書くことも。

訳注 エジプトの技術の神テムスが文字について神の王タムスに話したとき、タムスがそれに否定的であった逸話を上げて(弁論にたけ、著作を残さなかった)ソクラテスが、いろいろ「文字」の欠点を言いつつ他愛のない部分がある(プラトン『饗宴』)。

展にいたるまで、正確に反対が真だと、論理と合理性を強調することによって、論理的関係のより明快な表現として書き言葉を強調する傾向があったと哲学者たちは論じられるだろう。実際、哲学の現代に関する限り、数理論理の書き言葉の理想的記号言語に対して、日常の話し言葉のためにまじめな主張がなされたのは1950年代になってからである。デリダが「すべての出来事を通じた世界の歴史」についての大ざっぱな主張をするとき、その結果は単に誤解に基づくため、それほど黙示録的ではない。

しかし、デリダの息をのむほどの信じがたさは、何かもっと深いものが進んでおり、われわれがいま研究しなければならないことをほのめかす。書き言葉が本当は第一のものであり、話し言葉が本当は書き言葉の一形式であることを示すための彼の努力における戦略は、「書き言葉の古典的概念」が書き言葉に帰される特徴を特定し、その後これらが特徴やはり話し言葉の特徴であることを示すことである。そのためデリダにとって書き言葉も話し言葉もともに繰り返し可能、あるいは彼が好む言い方では、「反復可能」である。ともに制度的であり、誤解されることが可能であり、おそらくもっとも重要なのは、差異のシステムをあてにしていることである。

この最後の特徴は議論にとって重大である。デリダの考えはスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの業績から発展した。彼は「音素は人が考えるように、それ自体の積極的質によって特徴づけられるのではなく、それらが明白であるという事実によって特徴づけられる。音素は何にもまして対立する関係であり否定的実体である」と書いた(ソシュール『一般言語学講義』, p119)。<sup>訳注</sup>ソシュールは「言語においては差異しかない」(p. 120)とすることによってこの点を要約する。そのため、たとえば英語の単語「bat」における「b」の機能はその音響的特性だけに依存するのではなく、他の要素の音響的特性のクラスとの差異から区別されるクラスの部分を形成する仕方に依存している。この差異はわれわれが「bat」を「pat」から、「bed」を「red」からなどを区別することを可能にする。言語はその本質的機能が言語はシステムの要素の間際に依存している要素のシステムからなる。

これは重要な点である。だがどのようにデリダがそれを変形するか注意してほしい。

差異の戯れは、どんな時にも、どんな意味でも、結局単純な要素がそれ自身に現前することを禁じる総合と参照を前提とする。話し言葉の文章のためであれ、書き言葉の文章のためであれ、どんな要素も単に現前しない別の要素を参照することなく記号として機能としない。この織り合わされたものは — 音素であれ書記素であれ — それぞれの「要素」が、連鎖ないしシステムの他の諸要素の内部の痕跡に基づいて構成されることが結果する[斜体は私]。この織りあわされたもの、このテキスタイル(織物)、は別のテキストの変項においてのみ生み出されるテキストである諸要素内にも、システム内にも、どこにも単純に現前ないし、不在しさえするものはない。どこでも差異と痕跡の痕跡しかない[Positions, p. 26]。<sup>訳注</sup>

だが、これはソシュールの洞察から重要なシフトを伴う。言語の要素が、互いの差異のため

---

訳注 邦訳;フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』岩波書店、1972

訳注 邦訳;ジャック・デリダ『ポジション』青土社、2000

要素としてのみ機能するという正しい主張は、諸要素が他の要素の痕跡「からなる」(カラー)、「のうえに構成される」(デリダ)という誤った主張に変えられる。「これらはどこでも差異と痕跡の痕跡のみが存在する」。だが第二のテーゼは最初のテーゼと等価ではないか、帰結しない。要素が他の要素との関係のため、それがする仕方で機能するという事実から、諸要素の中にも、システムの中で何も、どこにも一度も単に現前も不在もしないということは単に帰結しない。どこにでも差異と痕跡の痕跡があるだけである。

実際、因果関係のカラーの「ディコンストラクション」でのように、議論はデリダが主張するものの逆を正確に示す。一例を検討しよう。私が理解する仕方で、「猫がマットにいる」という文を理解する。なぜなら私はそれが無限の - 実際に無限の - 他の文、「犬がマットにいる」「猫がカウチにいる」などの文とどのように関係するか知っているからである。だが、私は正確に自分が理解する仕方で、「猫がマットにいる」と「犬がマットにる」という二つの文の違いを理解する。なぜなら「猫」と言う言葉が第一の文に現前し、第二の文では不在であり、第二の文で「犬」という言葉が現前し、第一の文で不在だからである。差異のシステムは厳然と不在の差異を無効にするようなものは一切ない。反対に差異のシステムは正確に現前と不在のシステムである。

痕跡を支持する要素のこの抹消は、デリダの言語哲学において、そして間違いなく、ディコンストラクションの全形而上学において、カギとなる一手の一つ、あるいはおそらくカギとなる一手である。というのも次の段階で、言語は単に一群の「制度的痕跡」でしかないようなものだと主張することだからである。そしていったんこの一手が打たれば、デリダは簡単に話し言葉であろうと書き言葉であろうと、言語は書き言葉であるような仕方で、書き言葉を再定義できるからである。制度化された痕跡は「すべての記号作用(signification)のシステムに共通の可能性」である(Of Grammatology, p. 46)。話し言葉が本当は書き言葉であるという証明はその場合、書き言葉が両者を共に含むよう再定義されたため、些末に簡単になる。これは次の文章で現れる。私は「要旨」と同じくそのスタイルの説明として、再び長めに引用する：

音声中心主義は、人がその論証の堅牢な構造を形成する話し言葉と書き言葉の口頭概念を逆転する限りいかなる反対にも耐えない。口頭の、日常の考えは、ほとんど見えないが、すべてのそれ自体より厳格なまったくの事実である未開の地によって制限された古い歴史に沿って - 十分矛盾なく - 存在する。

私はむしろ、申し立てられた書き言葉の派生性、しかし実在的で大量のそれがひとつの条件においてのみ可能であると：「オリジナルな」「自然な」など…の言語が決して存在しなかったと、決して完全でなく、書き言葉によって決して手つかずでなかったと、それ自体常に書き言葉であったと示唆したい[斜体は私]。原=書き言葉の必然性と新たな概念をここで示し概要を述べたい；そして私はそれが卑俗な書き言葉の概念とともに本質的にコミュニケーションするだけのため、それを書き言葉と呼び続ける。後者は原=書き言葉の疑惑によって、話し言葉を他のものや重複するものに置き換え、その違いをなくそうとするため働きの欲望によって、その歴史的排除を課しえな

かった。私はその差異を書き言葉と呼ぶことに固執する場合、それは歴史的抑圧の働きの中で、その状況によってもっとも手に負えない差異を意味することを否定されたためである。それはもっとも密接な近さから生き生きした話し言葉への欲望を脅かす。それはまさに始まりの内部から、生き生きした話し言葉を侵食する。そしてこれから見るように、差異は痕跡なしには考えることができない[Of Grammatology, p. 56-57]。

さらにいったん痕跡と差異についての話の表現装置が書き言葉の、テキスト性の定義として扱われたなら、この表現装置はその場合、経験に、現前と不在の区別に、実在と表象の区別に繰り返し大量に適用される。いったん書き言葉が差異と痕跡によって定義され、これらが広く見いだされたなら、すべてが本当の書き言葉であることはすごく驚くべき発見ではない：「書き言葉以外何もなかった；差異の指示の連鎖、‘実在の’生起においてのみ生じることができ、痕跡から、代補の発動からなど、意味を汲む間にのみ加えられる代補、代補的意義以外何物もなかった」(Of Grammatology, p. 159)。そして繰り返す。「il n'y a pas de hors texte」(p. 158／訳注；「テキストの外部はない」)。

これを念頭に、われわれは話し言葉と書き言葉の区別のディコンストラクションの一般的強化を示すことが今やできる。

1. デリダのエキセントリックな西洋哲学史の読解、哲学者たちが、話し言葉を特権的としながら、大声で書き言葉を叱責していると考えられる読解は、哲学的伝統の主要な人物のテキストの実際の読解に基づいていない。デリダは三人の主要な人物、プラトン、ルソー、フッサールを何ほどか詳細に論じているだけである。むしろロゴス中心主義におけるすべてはこの問題次第で決まることが彼の確信によって動機づけられているようにおもえる。彼が－真理、実在の決定的なもののように－哲学に関する問題について決定的なものとして書き言葉の適切な再定義の概念の諸特徴をあつかうことができるなら、その場合彼はこれらの概念をディコンストラクションできると考える。

2. 話し言葉が本当は書き言葉であり、書き言葉が話し言葉に先立つという証明は再定義に基づいている。このような方法によって、人はなんでも証明することができる。人は金持ちが本当は貧乏人であり、真は本当は偽であるなど証明することができる。このような努力がもちえる関心は、再定義のため与えられた理由にある。

3. デリダの「劣った概念」を「矯正する」ための書き言葉の再定義は、二つの形式の同一性と差異の実際のいかなる経験的研究にも基づいていない。そんなものは一切ない。彼は例えば、話し言葉が話され、書き言葉が書かれるという事実、あるいは結果として書かれたテキストが話された発話の特徴ではないある仕方で時代を通じて存続する傾向があるという事実についてなにも示さない。そうではなく差異のシステムが機能する仕方の偽りの誤った表現に基づき、そしてその誤った表現は他愛のないものではない。書き言葉の表現装置を可能にし、まったく一般的に－経験、実在などに－適用されるようしつらえられている。

ミシェル・フーコーはかつてデリダの散文の文体を「曖昧主義テロリスト」(obscurantisme terroriste)と私に言って見せた。そのテキストは正確にそのテーゼが何であるかはっきり



説明できないほど曖昧に書かれており(ここが「曖昧主義」、そしてその後人がそれを批判するとデリダは「君はわかっていないね;君は頭が悪いね」(ここがテロリスト、原文仏語: “Vous m'avez mal compris; vous êtes idiot”)と言う。

### 3.

ディコンストラクションの帰結するものは何だと考えられているのか?特徴的にディコンストラクション主義者は証明も、反駁も、立証も、検証もしようとせず、彼は当然ながら真理を語らない。[2] 反対に、この全概念のファミリーは彼が克服しようと望むロゴス中心主義の一部である;そうではなく彼は共犯関係を無効にし、異議を唱え、克服し、侵犯し、暴露することを求める。そしてそのターゲットは哲学的、文学的テキストだけではなく、合理性の西欧的概念や、実在と仮象、真と偽の区別のような、我々の言語、科学、常識の概念を基礎づける前提なのである。カラーによれば、「非常に多くの読者たちが証明することができるような、ディコンストラクション的分析の結果は熟達の知識と感情である」(p. 225)。

この主張にともなう困ったことは、それがわれわれに、本物の知識を、ニセの知識から区別するし、正当な熟達の感情を大量のもったいぶった冗漫さによって生成された単なる熱狂から区別する何らかの方法をもつことを要求することである。そしてカラーとデリダが示す例はいくら控えめに言っても、全然説得力はない。カラーの本で、われわれは知識と熟達の次の例を手に入れる:話し言葉は書き言葉の一形式であり(諸所で)、現前はあるタイプの不在であり(p. 106)、周辺は実際は中心であり(p. 104)、字義通りは隠喩的であり(p. 176)、理解は、誤解の一形式であり(p. 176)、正気はある種のノイローゼであり(p. 160)、男は女の一形式である(p. 171)。一部の読者はこのようリストが単調のような熟達の感情をさほど生成しないと感ずるかもしれない。パラドクスの雰囲気、たとえば「真理は虚構性が忘れられてしまった虚構である」(p. 181)を与えることによって深淵に聞こえる何かを達成するための散文の経常的な歪んだ重々しさがディコンストラクション的書き言葉にある。

そしてもっとも多くのものがある。解剖学者たちは疑いなく、「身体のもっとも深い時空としてわれわれが考えるもの — 膾、胃、腸 — が実際織り込まれた外在性の空洞である」と学ぶことに関心をもつだろう(p. 198)。そして論理学者たちは、疑いなく、ロゴス中心主義が男根中心主義と本当に同じであることを学ぶことに関心をもつだろう。デリダによれば、「ファロゴセントリズム」はこの共犯を主張する;「それは一つの同じシステムである:優越した意味する記号(signifier)としての父性的ロゴス…とロゴスの勃起」(デリダ;カラーの引用、p. 172)。

### 4.

私はこれまであたかもわれわれがデリダの主張の適切な反映としてカラーの説明を理解できるかのように書いてきたが、私はカラーがデリダを実際よりましに、同時に悪く、デリダの

哲学のよりひどい側面の多くを置き去りにするか、単にうわべを取りつくろわれているという点でまじに見えるようにしていると思う。カラーは、たとえば、少なくともときどき、テキストが実在する世界を表象するという観念のデリダのディコンストラクションについて、テキストの外部はない(il n'y a pas de hors texte)と言うデリダの主張、私がすでに書いたとおり、話し言葉は本当は書き言葉だというデリダの観念に関する観念についてほとんど何も言わない。

だがデリダはまた本来の彼よりはるかに表面的なものとして現れる。デリダはテキストを扱うためのさまざまな手品の先導者として現れ、カラーはデリダにこうさせる本当の深い問題を理解しているようにはみえない。カラーはデリダがフッサールにおけるある特殊なテーゼに忠えており、それを行うためにハイデガーに多く由来する武器を使っていることに気づいていないようにみえる(カラーの参考文献にはフッサールはなく、ハイデガーはひとつだけしか含まない)。私はデリダの著作が、少なくとも私が読んだ限り、単に一連の混乱と手品だけではないと考える。実際扱われている大量の問題と犯されている大量の誤りがある。デカルトからフッサールに至る哲学的伝統、実際プラトンに遡る哲学的伝統の大部分が根源の探求を伴う。知識の形而上学的に特殊な根源、言語と意味の根源、数学の根源、道徳の根源など。たとえばフッサールは、意識経験が外的世界を指示するという前提を保留し、ないし「カッコに入れ」て、彼の意識経験を検証することによってそのような根源を追求した。そうすることによって、彼は経験の純粹で確実な構造を取り出し、記述することを望んだ。

現代、20世紀、ほとんどウイトゲンシュタインとハイデガーの影響のもとで、われわれはこのような種類の根源のこの一般的探究が間違った方向に導くものだと考えるようになった。古典的形而上学が倫理や知識になんらかの根源があると仮定した道はない。たとえば、われわれは伝統的な意味で「センスデータ」に言語や知識を基礎づけることができない。なぜならわれわれのセンスデータはすでにわれわれの言語や社会的実践が浸透しているからである。デリダは正確にそのような根源はないと理解しているが、彼はその後彼を古典的形而上学者にする誤謬を犯す。古典的形而上学の本当の誤謬は形而上学的根源があったという信念ではなく、何であれかんであれそのような根源が必要であるという信念、根源がないのであれば、何かが失われ、脅かされ、無効にされ、疑問視されるという信念であった。デリダが彼がディコンストラクションしようとする伝統と共有するのはこの信念である。

デリダは、科学、言語、常識のための超越論的根拠のフッサールのプロジェクトは失敗と考える。だが彼が理解できないことは、これがいかなる点でも科学、言語、常識を脅かさないということである。ウイトゲンシュタインが言ったとおり、それは正確にそれがあるとおりにすべてをそのままにする。たとえば、言語がもつ、あるいは必要とする唯一の「根源」は、人々が、真理を述べるため、命令をしたり、それに服従するため、感情や態度を表明するため、感謝、謝罪、警告、祝福をするため、それを使うことに成功するため、生物学的に、心理学的に、社会的に構成されているということである。

人は場合によってはディコンストラクションが誰でも戯れることができるある種のゲームであるという印象をもつ。たとえば、人は次のようにディコンストラクション主義のディコンスト

ラクシオンを発明できるかもしれない:ディコンストラクション/ロゴス中心主義(音声-男根-ロゴス中心主義)の階層的対立において、特権的項「ディコンストラクション」は実際に価値を剥奪された項「ロゴス中心主義」に従属する。というのも、ディコンストラクションの階層的優越性を確立するため、ディコンストラクション主義者は、議論と説得によって、彼が剥奪しようとするロゴス中心主義に訴えることによってその優越性を、その価値の優越性を表彰しようと試みることを余儀なくされる。だがこれを行う彼の努力は、先立つ論理の権威へのまさに自己言及的な依存のため失敗を運命づけられている。アポリア的止揚によってディコンストラクションはそれ自体をディコンストラクトする。

5.

最後の問いはこうである。ディコンストラクションがかなり明確で判然とした知的弱点を認め、王様は裸だということが注意深い読者にかなり明白でなければならないことを認める場合、なぜそれは文学理論家の間でそんなにも影響力をもつことを証明したのか?その問題をもっとはっきりさせよう:われわれは言語哲学の金ぴか時代の何かの中で生きている。[3]すでにこの世を去った偉大な巨人たち、フレーゲ、ラッセル、ワイトゲンシュタインの時代だけでなく、チョムスキー、クワインの時代、オースチン、タルスキ、グライス、ダメット、デイヴィドソン、パットナム、クリプキ、ストローソン、モンターギュやその他多くの第一級の著者の時代でもある。生成文法と発話行為の時代であり、真理条件的意味論と可能世界的意味論の時代である。

疑いなくこれらすべての理論家たちは様々な仕方で、誤り、欠陥があり、暫定的であったが、明確さ、厳格さ、正確さ、理論的包括性、そして何にもまして知的内容に関して、彼らはディコンストラクション哲学が書かれたそれよりはるかに優れている。その場合どのようにわれわれは、文学理論家の間でのディコンストラクション主義の人気と影響力を説明すべきなのか?なぜ事実まさにその知的弱さが人気の源であるように見えるのか?その現象を完全に理解するため人はアメリカの大学の英語学部や他の現代言語学部の文化について私が行うよりもっと多くのことを知らねばならないだろう。だが私は今現在の文学的理論家の背後にある前提に非常によく当てはまるディコンストラクション主義者のイデオロギーの特定の特徴があることを観察してきた。

わたしが文芸評論家の聴衆に講義をしたとき、文学理論の議論において二つの普及した哲学的前提を見つけた。ともに十分奇妙なことに論理実証主義に由来するものだった。第一に、厳密かつ正確に区別がなされないなら、それは本当は全然区別ではないという前提がある。多くの文学理論家は、例えば、フィクションとノンフィクションを明確に区別しないことはフィクションの理論に対する反対ではないこととか、隠喩的なものと非隠喩的なものを明確に区別しないことは比喩の理論に対する反対ではないことを理解できない。反対に、ある現象を曖昧なものとして正確に特徴づけなければならないことは、曖昧な現象の正確な理論の適切性の条件なのである。そして区別は関連する、周辺的な、多様なケースのグループを認めることに関する区別以上のものである。

本物の区別が厳密になされなければならないという前提をもととする人たちは、そのようなすべての区別を無効にするデリダの試みにとってうってつけである。ところでカラーはこの前提を共有する。たとえば彼は表現が同じ文で使用と言及の両方がなされることができるといふことは、どういうわけか、哲学者や論理学者が表現の使用と言及の間で行う区別を弱めると主張する(pp. 119-120)。<sup>訳注</sup> 同様に、彼は単一の発話が意識的なひとつのタイプの発話行為と無意識的な別のタイプのそれを表現しえるという事実が発話校の理論にとって深刻な問題であるとかんがえる(p. 124)。彼はまた誤った発話行為の理論が何が約束であり何が約束でないかの間のある種の正確な分割線を追求すると考えている(p. 135)。だがそれは実際には実際の生活において発話行為のそれぞれのグループ内のすべての種類の周辺のケースがありえるという理論の帰結である。

第二に、等しく実証主義的に、言語や文学作品に適用される概念が、それらが真に妥当であろうべきなら、何らかの検証の機械的手続くを認めなければならないという主張がある。そのため、たとえば、人が言語における糸の役割を特徴づけようとする亜場合、多くの批評家は直ちに意図の現前と内容の検証のためにも機械的基準を要求するのである。だがもちろんそんな基準はありはしない。どのように我々は人の意図が何であるか語るのか? 答えはあらゆる種類のやり方でであり、われわれは明らかに最も有利な場合に間違っ理解させる。だが — 著者の意図を特定するための、あるいはある著作がフィクションの著作かどうか、またある表現が隠喩的に用いられているかどうかを決定するための機械的な決定の手続きがないという — このような事実は、決して意図、フィクション、隠喩の概念を無効にすることはない。われわれのこれらの概念の使用と意図的と非意図的、疑似的と隠喩的、フィクション的とノンフィクション的文章の間の区別は言語的实践と社会的実践の複雑なネットワークに基づいている。一般にこれらの実践は、厳密な意図的境界線とある現象の現前ないし不在を検証する単純な機械的方法を必要もしないし認めもしない。繰り返せば、私が批判しているこれらの前提の重大な実証主義は、根源なしにわれわれには、記号の自由な戯れ以外何もないというデリダの前提を伴う断片についてのものである。

そしてディコンストラクション主義哲学のより重大な要求さえある。すべてのテキストは本当は何であれフィクション的であり、フィクションは科学と哲学とはまったく異なるという主張はロゴス中心主義的先入見としてディコンストラクションできると語ることはフィクション的テキストに専門的に関心をもつ一部の人々にとって明らかに非常に相性がよく、そしてわれわれが「現実」と呼ぶものが単にテキスト性にすぎないと語るのは、肯定的に気分を高揚させるように思える。さらに、そのような人々の生活は以前考えられたより安楽になる。なぜなら今や彼らは著者の意図について、正確にテキストが何を語るかについて、テキストと世界の区別について心配する必要がないからである。なぜならすべては記号の単なる自由な戯れだからである。このディコンストラクションによって感染される「熟達のセンス」の、私が帰

訳注 「使用と言及」は一般に Use and Mention Error (fallacy) として知られる、言葉の意味ないし指示対象の特性と、その言葉の特性を取り違える誤謬のこと。後者に引用符をつけることでしばしば回避される。他愛のない例; カラーは『ディコンストラクション』を著し、かつ「カラー」はカタカナ三文字だから、あるカタカナ三文字が『ディコンストラクション』を著した、例えば「サール」が。ポストモダン的に深刻な例; 「真理」はシニフィエであり、シニフィエとシニフィアン結びつきは恣意的だから、真理の意味は恣意的である、とか…。

謬法により偽と考える上限は、第一の創造的任務は、今日文学的芸術家から批評家に手渡されたというジェフリー・ハートマンの主張である。

## 注

[1] おそらくデリダとカラーがこのような話し言葉と書き言葉の関係についてのプラトンとアリストテレスの奇妙な読解をもった理由は、彼らが古代ギリシア人が通常大声で音読したことに気づいていないことである。われわれが口を閉じて無音で読む実践は中世まで「めったに行われなかった」(W.B. Stanford, *The Sound of Greek*, University of California Press, 1967, and B.M.W. Knox, "Silent Reading in Antiquity," *Greek, Roman and Byzantine Studies*, Winter 1968, vol. 9, no. 4.を参照)。アリストテレスの「話された言葉は精神的経験を表象し、書かれた言葉は話された言葉を表象する」という主張はこの事実を照らして理解されなければならない。

[2] 真理の問いについて、カラーは両方の方法でそれを保持することを望む。彼は真理はある種のフィクションであると言う(p. 181)とともに、「真理は受け入れられた枠組み内で示されうるものであり、誰かがそれを信じることができるか、検証できるかどうかにかかわらず、単に真であるものであると言う(p. 154; 斜体は私)。斜体にしたフレーズはフィクションとしての真理の概念と矛盾し、あるいはディコンストラクションの精神でもない。

[3] 私はディコンストラクションは専門的哲学者にほとんど支持されていないのを知ったと言った。だがだがディコンストラクション主義者が大いに称賛する何人かの著名な例外がいる。これらの一人はデリダを「でたらめに悪名を与えるたぐいの哲学者」と呼んだ。もちろん私はこれがディコンストラクション主義者のボキャブラリーで称賛の表現であるかもしれないことを排除できない。